

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月10日現在

機関番号：14201

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22720006

研究課題名（和文） ポスト・環境プラグマティズムの時代における自然の価値の認識論の可能性

研究課題名（英文） Research on the possibility of epistemology of values of nature for post-environmental-pragmatism environmental ethics.

研究代表者

神崎 宣次（KANZAKI NOBUTSUGU）

滋賀大学・教育学部・講師

研究者番号：50422910

研究成果の概要（和文）：本研究の最初の二年間では、環境プラグマティズムによる、自然の内在的価値の議論を追求してきた従来の環境倫理学に対する批判を受けとめつつ、環境プラグマティズムとも異なった方向性となりうる立場としての環境徳倫理学の検討を中心に行った。また最終年度には、内在的価値を持つ道徳的配慮の対象を岩や農地などを含む、より広い範囲の自然物にまで拡張しうるような議論の枠組みを検討した。

研究成果の概要（英文）：In the first two years of this project, I did research on environmental ethics as an alternative to environmental pragmatism that had criticized traditional environmental ethics for persisting in the intrinsic value of nature and then making no contribution to resolve actual environmental problems. In last year, I investigate theoretical framework which could extend the class of moral patient to wider classes of natural objects like rocks, farmland, etc.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学

キーワード：環境倫理学・徳倫理学・環境心理学・環境教育・道徳的配慮の対象・内在的価値・動機づけ

1. 研究開始当初の背景

研究の背景としては、日本の環境倫理学の研究状況においても環境プラグマティズム、とりわけブライアン・ノートンやアンドリュー・ライトなどによる、自然の内在的価値の哲学的正当化という従来の環境倫理学の取り組みは完全に失敗しただけでなく、現実の環境問題解決に何らの貢献もしなかったと

する言説が影響力を持つようになっていたことがある。

しかしながら、このような言説は哲学的認識論や存在論や価値論からの論理的帰結ではなく、環境倫理学が実践的あるいは政治的影響力をいかに持ちうるかという戦略上の言説にすぎないという意味で、環境倫理学の

哲学あるいは倫理学としての限界を示したものでなかった（にもかかわらず、そのように受けとられてしまった）。さらに、実際の環境保全に携わっている人びとの動機を検討すれば、少なくともその一部の人びとは自然に内在的価値を認め、それを環境保全に貢献する動機としていることは明らかである。

したがって、環境プラグマティズムによって欠如が指摘された現実の環境問題解決への貢献可能性を確保しつつも、それに対する哲学的・倫理的なアプローチが可能であると示すことが、環境倫理学全体にとって決定的な重要性を持つ課題となっていたのである。いかえれば、環境プラグマティズムによる批判を受けとめた上で、それとは異なった環境倫理学の可能性を示すことができれば、環境倫理学は自然の価値の認識論を少なくとも性急に断念する必要はないということになる。

上で述べた課題を果しうる立場として、本研究計画開始時において最も有望と思われた立場は環境徳倫理学であった。ノートンやライトの主張に反して、必ずしも人間中心主義的ではないかたちで環境倫理学を展開しようというのがその利点といえる。また、徳という観点を採用することのもう一つの利点は、自然の価値は環境的徳を備えた人物には認識可能という主張が可能であるという点にある。

2. 研究の目的

最初の二年間の研究は、上記の研究背景と問題意識に基づいて、環境倫理学に対する徳倫理的アプローチの可能性を検討することを目的として行った。その際に倫理学理論としての研究と並行して、環境心理学や保全心理学といった環境配慮行動に関連する性格や態度（＝環境的徳）についての実証的研究や、そのような性格や態度を教育に活かす環境教育という実践的領域との接合可能性をも明確にすることを目指した。

最終年度は、内在的価値を持つ、道徳的に配慮されるべき対象は人間以外の存在をも含むという議論の検討を行った。動物倫理学とは違い、環境倫理学においてこの議論が哲学的に重要になるのは、岩や農地や生態系のような生命を持たない、あるいは快苦の感情を持たない対象も環境倫理学では道徳的配慮の対象とされうるからである。アルド・レオポルドが「土地倫理」で述べていたように、この課題こそが、自然や環境についての倫理学的研究の根本問題であり、環境プラグマテ

ィズム以降の現在においてもその重要性は変わらない。

3. 研究の方法

環境プラグマティズムによって環境倫理学が実践に解消されてしまいかねない状況の下で哲学・倫理学としての環境倫理学の可能性を示すという上記の目的を達成するため、本研究では伝統的な哲学・倫理学の研究手法である文献の読解、分析を採用した。ただし、上で述べたように倫理学あるいは環境倫理学の文献だけでなく、心理学関連分野や環境教育関連分野の文献の調査も併用した。また三年目には、動物倫理学、ロボット倫理学、情報倫理学などにおける、人間以外の対象を道徳的配慮の対象とする議論のサーヴェイを行った。

4. 研究成果

最初の二年の成果は、学会発表で公表されているだけでなく、大部分は論文としても公表されている。

(1) 一番基本的な成果は環境プラグマティズムの登場以降、おおむね 1990 年代以降の環境倫理学に表われた方向性についての調査と、そのそれぞれについての評価を行ったことである。その結論は、他人をいかに効率的に動機づけるかという政治的あるいはプラグマティックな観点しかもたない立場と比べて、環境徳倫理学のような立場は、それを論じる論者自身の倫理性をも問う点で、環境倫理学が当初から持っていた関心を果しうるものとして評価に値するというものである。

(2) 環境プラグマティズムによる環境倫理学への批判の一つは、自然の価値についての哲学的議論が人びとを実践的な環境問題の解決にむけて動機づけることに失敗してきたということにあった。この批判に反論するために、環境心理学などでの動機づけについての実証的な研究成果を参照しつつ、哲学的な環境倫理学がこうした道徳心理学的な問題関心と接点を確保しうることを示した。

(3) 自然の価値の認識という問題が徳倫理的アプローチを採用すれば比較的自然的なかたちで解決される可能性がある。

(4) 実際の行動を起した何人かの環境倫理学上の重要人物が持っていた動機、および問題に対する態度の解明を、とりわけ実際の行動を起すことに個人的なリスクが伴っていたケースに関して行った。そこで明らかにな

ったのは、個人的なリスクを背負ってでも行動せずにはいられないという強い動機づけが存在する場合があること、そしてそうした動機づけの少なくとも一部として自分自身の倫理性への配慮がある可能性があること、の二点である。

(5) ポール・トンプソンの農業倫理は農耕的な徳 agrarian virtue を基礎とする徳倫理学的アプローチの一種であるが、環境破壊をもたらした人間中心主義的な態度から距離をとるための道具としてそのような徳を提唱するという彼の議論の背景にある問題意識には従来からの環境倫理学と共通する点があると同時に、道徳的多元主義の主張を環境プラグマティズムと共有しうることを示した。

三年目の研究成果は複数の学会等の機会でも公表することができたが、編集作業上の問題などがあり、論文としては公開の目処が現時点でも立っていないままになっている。

(5) 道徳的配慮の対象、いいかえれば道徳的被害者 moral patient の範囲に関する議論が、近年ロボット倫理学の登場によって再び論じられるようになっており、そしてその議論の過程において環境倫理学における過去の文献が参照されるようになってきている。そうした議論の流れにおいて、岩などの無生物や畑などの人工物をも道徳的非行為者として扱おうとする理論的枠組みを与えようことを示した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

① 神崎宣次、他者の態度への関心 - 環境プラグマティズム以降の環境倫理学の方向性についての検討と評価、哲学研究、査読有、590号、2010、pp. 29-47

② 神崎宣次、環境倫理学のための道徳心理学、実践哲学研究、査読有、33号、2011、pp. 128-154

③ 神崎宣次、環境徳倫理学 - 倫理学としての環境倫理学の新しい方向性 -、倫理学年報、査読有、第60集、2011、pp. 173-185

④ 神崎宣次、異議申し立ての抑圧に抗して - 沈黙とアドヴォカシーをめぐる研究者の倫理、社会と倫理、査読無し、第26号、2012、

pp. 19-38

[学会発表] (計 9 件)

① Nobutsugu KANZAKI、Moral Psychology in Environmental Ethics、Fifth International Conference on Applied Ethics、2010年10月5日、北海道大学

② Nobutsugu KANZAKI、Rethinking Precautionary Principles: after 3.11、(First) Japan-Taiwan Workshop on Analytic Philosophy、2011年6月9日、Academia Sinica、台湾

③ 神崎宣次、“value-action gap”の検討: 向環境的行動の心理学と倫理学、応用哲学学会、ワークショップ「倫理学と心理学」、2011年9月24日、京都大学

④ 神崎宣次、持続可能性の倫理学と心理学: パーソナルな問題と社会的な問題、日本倫理学会、ワークショップ「J. S. ミルの Stationary State における人間と社会: 持続可能性の経済学-倫理学-心理学」、2011年9月30日、富山大学

⑤ Nobutsugu KANZAKI、Applied Ethics and Intellectual Suppression、6th International Conference on Applied Ethics、2011年10月30日、北海道大学

⑥ Nobutsugu KANZAKI、A Version of Environmental Virtue Ethics: A Discussion on Agricultural Ethics from the Perspective of Pluralism in Environmental Ethics、International Conference on Agricultural Ethics in East Asian Perspective、2012年3月1日、National Taiwan University、台湾

⑦ 神崎宣次、道徳的配慮の対象としてのモノ: 環境倫理学とロボット倫理学における非人間中心主義、応用哲学学会、ワークショップ「ロボットの倫理学と技術哲学」、2012年4月21日、千葉大学

⑧ 神崎宣次、Ethics for (any)thing: Nonanthropocentrism in Environmental Ethics, Animal Ethics, Robot Ethics, etc.、First Conference on Contemporary Philosophy in East Asia、2012年9月9日、Academia Sinica、台湾

⑨ 神崎宣次、道徳的被害者性概念の検討、応用哲学学会、2013年4月20日、南山大学

〔図書〕（計 1 件）

①戸田山和久・出口康夫 編 神崎宣次、応用哲学を学ぶ人のために、世界思想社、2011、全 360 ページ（担当箇所 pp. 298-310）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

神崎 宣次 (KANZAKI NOBUTSUGU)

滋賀大学・教育学部・講師

研究者番号：50422910

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし